

本当の「勉強法」を

知りたくないか？



医師・manavee 講師

とらおとく

『目次』

<u>前書き：プロローグ</u>	p4	<u>実行に移すにあたって</u>	p37
<u>第一章：正しい勉強法の概要</u>	p8	セットを用意する	
<u>使えない勉強法</u>	p8	理論式にあてはめる	
枝葉末節論に終始する			
単なる自己啓発である			
<u>正しい勉強法</u>	p10	<u>勉強量と試験の関係</u>	p40
当たり前の勉強法		試験問題に対する心構え	
さらなる勉強の本質		試験に必ず合格する方法	
<u>本書の展望</u>	p13	<u>第五章：意志</u>	p44
		<u>意志の分析</u>	p44
		<u>意志の根源</u>	p45
<u>第二章：勉強法理論</u>	p15	意志を持つということ	
<u>勉強法の理論</u>	p15	勉強は楽しいものか	
勉強法を表す理論式		現実的な話	
勉強法の展望		<u>勉強することの意義</u>	p48
		よりよく稼ぎ、生きるため	
<u>第三章：時間</u>	p18	教養や学問を身につけるため	
<u>時間の分析</u>	p18	後悔先に立たず	
<u>所要時間</u>	p18	<u>強制されるのも一つの手</u>	p52
本来のあり方			
マイペースが可能			
<u>持ち時間</u>	p22	<u>第六章：スペック</u>	p54
現実的なあり方		<u>スペックの分析</u>	p54
マイペースの愚		<u>勉強に関わるスペック</u>	p55
<u>時間コントロールのコツ</u>	p25	理解力	
明確に決定する		暗記力	
熟成期間 1/5 ルール		継続力	
		応用力	
<u>第四章：勉強量</u>	p28	<u>勉強のスペックのまとめ</u>	p59
<u>勉強量の分析</u>	p28	<u>スペックの考え方</u>	p60
<u>勉強量の決定</u>	p29	スペックの評価法	
教材単位で決める		スペックの優劣	
隅から隅まで		スペックの限界	
量決定のお作法 1			
量決定のお作法 2			
<u>勉強量に伴うべき質</u>	p36		

<u>第七章：手法理論</u>	p65	語呂合わせ	
手法の分析	p65	その他	
手法の理論	p66	<u>暗記を助ける手法 4～想起～</u>	p106
手法理論 1		<u>暗記の指標</u>	p107
手法理論 2			
まとめ			
<u>第八章：理解法</u>	p70	<u>第十章：継続法</u>	p110
<u>理解に関する心構え</u>	p70	<u>継続に関する心構え</u>	p110
<u>理解するということ</u>	p71	<u>継続するということ</u>	p111
理解するとはどういうことか		継続するとはどういうことか	
理解することの特徴 1		継続することの特徴 1	
理解することの特徴 2		継続することの特徴 2	
<u>理解を助ける手法 1～順番～</u>	p77	<u>まず継続する方法</u>	p113
知識間のギャップを埋める		既成事実をつくる	
目をつぶって先に進む		全体像から把握する	
<u>理解を助ける手法 2～繋がり～</u>	p81	こまめにゴールを設定する	
パーツに分解する		<u>うまく継続する方法 1～時間～</u>	p119
具体例や卑近な例に置き換える		時間コントロールの原則	
図・絵・表などを利用する		時間コントロールの工夫	
手を動かす		<u>うまく継続する方法 2～反復～</u>	p121
<u>理解の指標</u>	p86	反復の有用性	
		反復のポイント	
		反復のモデル	
<u>第九章：暗記法</u>	p89	<u>第十一章：応用法</u>	p130
<u>暗記に関する心構え</u>	p89	<u>応用に関する心構え</u>	p130
<u>暗記するということ</u>	p90	<u>応用するということ</u>	p132
はじめに		応用するとはどういうことか	
暗記するとはどういうことか		応用することの特徴	
暗記することの特徴		<u>応用を助ける手法 1～土台強化～</u>	p136
<u>暗記を助ける手法 1～注意～</u>	p95	<u>応用を助ける手法 2～情報処理～</u>	p137
注意が向く		<u>スピードを身につける手法</u>	p140
注意を向ける		スピードについて	
<u>暗記を助ける手法 2～反復～</u>	p99	反射でできるものを増やす	
<u>暗記を助ける手法 3～理解～</u>	p99	小技を身につける	
知識同士を関連づける		制限時間内に済ます訓練	
既にある知識と関連づける			

<p>第十二章：インプット</p> <p><u>インプットとは</u></p> <p><u>インプットと x 軸の交わり</u></p> <p><u>インプットにおける心掛け</u></p> <p>系統的な学習</p> <p>マクロの視点</p> <p>ミクロの視点</p> <p><u>インプットの場の利用法</u></p> <p>系統講義を受ける</p> <p>自力で教材を読む</p> <p>第十三章：アウトプット</p> <p><u>アウトプットとは</u></p> <p><u>アウトプットと x 軸の交わり</u></p> <p>はじめに</p> <p>アウトプットしながら応用する</p> <p>アウトプットしながら理解する</p> <p>アウトプットしながら暗記する</p> <p><u>アウトプットにおける心掛け</u></p> <p><u>アウトプットの場の利用法</u></p> <p>問題集を解く</p> <p>確認試験を受ける</p> <p>模擬試験を受ける</p> <p><u>解答法</u></p> <p>解答に対する心構え</p> <p>解答法を身につける手法</p> <p>論述式解答のポイント</p> <p>その他のポイント</p> <p>第十四章：インプット&アウトプット</p> <p><u>インプット&アウトプットとは</u></p> <p><u>勉強法 y 軸のマネジメント</u></p> <p><u>教材の選び方の捕捉</u></p>	<p>p145</p> <p>p145</p> <p>p145</p> <p>p146</p> <p>p151</p> <p>p154</p> <p>p154</p> <p>p154</p> <p>p159</p> <p>p160</p> <p>p165</p> <p>p176</p> <p>p176</p> <p>p176</p> <p>p178</p>	<p>第十五章：総合論</p> <p><u>勉強法総合論</u></p> <p><u>勉強のエッセンス</u></p> <p>系統的な勉強</p> <p>独学のスピリット</p> <p>第十六章：付録</p> <p><u>付録について</u></p> <p><u>頭のよさ</u></p> <p>本当の頭のよさ</p> <p>倫理にあてはめる</p> <p>少しだけの意識</p> <p><u>限界を知ること</u></p> <p><u>知能行動</u></p> <p>後書き：エピローグ</p>	<p>p180</p> <p>p180</p> <p>p180</p> <p>p185</p> <p>p185</p> <p>p185</p> <p>p189</p> <p>p191</p> <p>p193</p>
--	--	---	--

『プロローグ』

「たった〇ヶ月で、偏差値 30 アップ!」、「勉強しないで、〇〇に合格!」、「一日〇分の勉強だけで、あっという間に天才に!」、「こんなに楽な勉強法があった!」……

巷には入学試験の勉強にせよ、資格の勉強にせよ、あまりに膨大で多様な「勉強法」が出回っています。しかし、ここでふと冷静に考えてみてください。これまで、**頭数だけは豊富にあった「勉強法」の中で、その触れ込みに偽りなく、本当に本質を捉え、世のため人のために役立ったものがあったのでしょうか?**

「学業成績を上げたい」と思う人達は、それらの「勉強法」の恩恵にあやかろうとしますが、残念な話、ほとんどの場合徒労に終わってしまいます。実際に手を出してみて、全く効果がなかったという経験をした人も多くいるでしょう。また、世の「本当の成績優秀者」にアンケートでもとってみてください。「それらの勉強法を知ったおかげで、昔はバカだったのに今は成績優秀になりました」などという人はまず存在しないでしょう。そんな人が存在するのは、その勉強法の広告欄の中（すなわちサクラ）だけです。

ここからわかることは、こうした「いわゆる勉強法」のほとんどは、**インチキな「まやかし」に過ぎない**ということです。これは、「ダイエット法」などと同じ理屈です。明らかに虫の良すぎる手法でも、「こんな工夫をすれば、すぐ驚くような効果が現れますよ」という甘い言葉で誘惑し、目新しい手法や小手先のテクニックを提言すれば、いとも簡単に庶民を食物にできるのです。それを裏付けるかのように、物によって主張はてんでバラバラです。例えば、「丸暗記から始めろ」というものから、「暗記は絶対にするな」などというものまであります。こんな支離滅裂なことになっている時点で、信用に値するはずがありません。いくら人を幻惑しても、嘘が嘘であることに変わりはないのです。

このような茶番劇には、いい加減に終止符を打つべきです。皆さんも、多少の辛さは覚悟する代わりに、**本質を捉えた「本物の勉強法」**をそろそろ求めているのではないのでしょうか。本書は、その要求に最大限お応えできるような、「まやかし」とは正反対に位置する「勉強法」の本を目指そうと思っています。

それでは、本当に社会や人のためになる「本物の勉強法」が捉えているべき「本質」とはいったいどんなものなのでしょうか。それは、本書を根底で支える二つのポリシーに通じます。

第一に、「**当たり前の勉強法**」を改めてきちんと整理し直すということです。

前述の通り、成績優秀者は、「特殊な秘密の勉強法」を知っているから優秀になったわけでは、決してありません。彼等を成績優秀にした根本的な原動力は、「正しい勉強法」を実践しているということだけです。そして、この「正しい勉強法」は、驚くほど当たり前、かつシンプルなものです。古来より人類が培ってきた「正攻法」と呼べる勉強法は、いつの時代になっても変わることはありません。例えば、理解しなければならないものは理解しなければならないし、暗記しなければならないものは暗記しなければならない。そんな

なことはわかりきっている話です。

それでは、「正しい勉強法」は「わかりきっている」から、もはや目を向ける価値がないのでしょうか。答えは否です。自問自答してみてください。皆さんは、その「わかりきった勉強法」を本当に正しく把握し、実践できているでしょうか？ そんなに「わかりきっている」なら、それを人に説明できるでしょうか？ そう問われてみると、「超優秀」なごく一部のを除いて、ほとんどの人が言葉に詰まるに違いありません。つまり、「わかりきったつもり」になっているだけなのです。「そこに当たり前前の勉強法がある」ということは**感覚的にはわかっている、実はその本体をしっかりと知らない**のです。「正しい勉強法」は既に知り尽くされたもので、もはや確認の必要がないなどというのは、大きな幻想に他なりません。

こうした状況となっている最大の原因は、「正しい勉強法」が主に「耳学問」であることです。「正しい勉強法」を立派な「学問」のように系統的にまとめることは大変難しく、学校や塾で勉強していく過程で、ちよくちよく「語呂合わせを活用して暗記しましょう」とか「これはこう考えるとよくわかる」とかいった助言を受けることはあっても、それらのノウハウがストーリー性をもって提示されることがありません。よって、それらの断片的な情報だけを頼りに、経験的に体で覚えていくしかないのです。結果として、ほとんどの人はその正体を完全には把握できないまま終わってしまいます。当然、それ故に多くの方は「成績優秀者」となりえないわけです。

この事実を、やすやすと看過するわけにはいきません。一見「当たり前」でありながら、実情は全くそうでない勉強法を、今一度改めて整理し直すということは、唯一無二の「本質」を捉えているといえるでしょう。

第二に、「**発展的、革新的な勉強**」にも通用するということです。

これまでは「普通に、学業成績が優秀になる」という枠組みの中での話でした。しかし、もう一つ忘れてはいけないのが、「成績優秀になった後」の話です。良い成績を修めることだけが目標なら、前述の「当たり前前の勉強法」は十分すぎる役割を果たします。しかし、裏を返すと、それはあくまで「学問の初歩中の初歩」に過ぎないということも事実です。

私達は、しばしば「決められた範囲を勉強してきて、試験で高得点をとる」ということさえできればいいと思いがちですが、それは「勉強」の本来の目的を見失っています。実際、人が社会生活において直面する問題のほとんどは、学校や塾から「教育課程」として用意された、型通りの勉強内容がこなせるだけでは解決できないはずで、そこには、「模範解答」のある勉強ではなく、問題提起から正解を導くまでの全てを自力で行わなければならない、真の意味での「勉強」が必要なのです。これは、最先端の学問研究をする人だけに当てはまる話ではありません。通常の仕事をこなすのだって、状況に応じた最適な判断と、優れたパフォーマンスを求められるのですから、本質的には同じことです。そして、この中から、新たな学問的発見をすとか、社会を変える起業や提言をすとかいった「発

展的、革新的な勉強」へと繋がるものが出てくるわけです。

ただし、それを扱うために、極めて高度な勉強法や専門的な学問分野の解説などを実用書レベルで行うことは不可能です。そこで、本書でできる最大限の範囲で「発展的、革新的な勉強」への示唆をすることを考えなければなりません。

その際、一見逆説的なようですが、やはり「当たり前の正しい勉強法」を正しく分析することが最も近道になるのです。その理由のヒントは、「普遍的な勉強法のエッセンス」は、どんな勉強のレベルにおいても全く同じだということです。例えば、「積み木」を想像してみてください。積み木は高く積めば積むほど崩れやすくなりますから、「100段目の上に101段目を積む」という行為は、大変難しく高度なことです。しかし、そのノウハウは2段目の上に3段目を積むときと全く同じです。つまり、いずれの場合も、最も大事な原則は「既に積まれたもののバランスが崩れないように、真上に積み木を乗せる」ということであり、それ以上でもそれ以下でもありません。これと同様に、「当たり前の正しい勉強法」という初歩段階から習得できるエッセンスは、上級の段階においても最も重要な方法論として通用するものなのです。

大事なことは、「当たり前の正しい勉強法」の会得に励む際に、「この延長線上に、発展的、革新的な勉強があるのだ」という意識を持つことです。本書は、全体の構成の仕方に工夫を凝らし、以上の視点をしっかりと活かすことができるようにしてあります。最後まで通読していただければ、きっとその巧妙な仕掛けに気がつくことでしょう。

これら二点の「本質」をしっかり捉えること、すなわち「当たり前の正しい勉強法」を徹底的に正しく分析し、そして発展性のあるように認識し直すことは、今も昔も変わらず大切なことであるはずですが、しかし、思いを馳せてみれば、過去にそのような試みが本格的になされたことはほとんどありません。そして逆に、冒頭に挙げたような、真実から目を背けた「まやかしの勉強法」が跋扈する嘆かわしい結果となっています。

ある意味、「勉強」は「言語の習得」と同じで、日頃からそれと親しみ、しばしば誤りを繰り返して、様々な経験をしながら身につけていけばよいという考え方も一理あります。しかし、わけもわからず大海原をさまようよりは、もっと無駄なく、効率よく正しい方法論に習熟し、なるべく早く「勉強」の本当の楽しみや奥深さを発見できるように、「羅針盤」となるものがあってもよいのではないかと思います。

本書の狙いは、まさにそこにあります。古今東西、普遍的に成績優秀者を成績優秀者たらしめてきた「正しい勉強法」の概観や基本ルールを、系統的にまとめるというチャレンジをするのです。この試みの結晶は、現時点で勉強が得意でない人はもちろん、既にそれなりに成績優秀である人にとっても、自分自身のブレない「勉強法」を確立するために、大きな恩恵をもたらすはずですが。

本書は、最善の「勉強法」を求めている人々に向けて、「未来永劫、人類が存続する限り通用する、家庭に一冊置いておいても決して損をしない勉強法のマニュアル」を目指して

執筆しました。これをきっかけに、皆さんを取り巻く「勉強」や「教育」などをもう一度考えるようになっていただければ、これ以上の喜びはありません。

勉強に励む学生、社会人、そして教育者など、「勉強」にまつわる全ての人へ捧げます。

『第一章：正しい勉強法の概要』

<使えない勉強法>

前書きでも触れましたが、巷には量は膨大でありながら、利用価値には疑問符がつく勉強法が溢れています。それらはセンセーショナルに価値を謳う割には、全くもって「使えない」ことがほとんどです。逆に、こうした勉強法がダメな点を炙り出せば、それを反面教師にすることで正しい勉強法を考えることができます。そこで、まずはインチキ勉強法が「使えない」理由を分析してみましょう。

- ・ 枝葉末節論に終始する
- ・ 悪趣味な自己啓発である

[枝葉末節論に終始する]

「枝葉末節論に過ぎない」とは、すなわち「物事の変化に本当に寄与する、中核部分を押さえていない」ということです。例えば、「暗記法」を題材にすれば、それだけで立派に一冊の本としての体をなします。実際、そのような書籍はウンザリするほど書店に並べられているでしょう。しかし、一步引いて考えてみれば、「暗記」だけで勉強の全てが解決するはずがありません。勉強の成果をあげるには、「暗記」に限らず、「理解」や「応用」といった様々な能力が、多面的・複合的に要求されます。さらには、それが「暗記法」の中でも「メイン」とはなりえない特殊な手法しか紹介していないのであれば、なおさら事態は悪化します。同様のことは「速読法」などといった類のものにも当てはまります。

当然、その内容自体が正しいと仮定しても、それだけではいつまで経っても根本的な学力を上昇させることはできません。喩えるなら、野球の投手を目指している人に、ちゃんとした体の造り方や直球の投げ方を教えずに、珍しい変化球の投げ方をアドバイスしているようなものです。これでは、本人にとって有効活用できないばかりか、かえって基本のフォームを乱し、成績を落とす原因にもなりかねません。

さて、「枝葉末節」といえば、前述のような意味を示すのが普通ですが、「対象とするレベルが枝葉末節である」という場合もあります。

例えば、「東大生が書いた」とか「有名予備校講師が書いた」という触れ込みがあると、一見信頼がおけそうなものです。しかし、それでも生じる問題点があります。それは、内容が多くの人々のレベルと乖離しているということです。つまり、90点を95点に上げるような勉強の工夫を、50点の成績の人に教えるというような状況です。

さて、「東大生が書いた勉強ノウハウ」を読む人は、実際どのような人でしょうか？東大受験生だけでしょうか。それは違います。世の中には、東大に手の届くレベルでない人の方が圧倒的に多いのですから、むしろ、彼等が東大生の勉強法にあやかろうとしてそれを読むケースの方がずっと一般的なはずで、ここで、「東大生が書いた勉強ノウハウ」は、その東大生が自分自身の経験を結晶化した内容になっていますから、その内容が「東大レ

ベル」を見据えているがために、大半の読者にとって「崇高すぎる助言」がされることになってしまうのです。これは、先ほどの野球投手の話と同じく、まずクリアすべき段階を飛び越えて、本当の実力アップに寄与しない枝葉末節論に終始しているのと同じことです。成績不振者が抱えている「成績が悪い原因」は、そのような崇高なレベルの話ではなく、もっと原始的で基本的なレベルに存在するのです。

一般論として提示されるべき「勉強法」は、勉強が得意でない人から得意である人まで、普遍的に通用する根幹的なものでなければなりません。

全体像を把握していない、もしくは内容と対象者のレベルに乖離があるといったように、枝葉末節論に終始している「勉強法」は数多い。
仮にそれらの内容が正しいとしても、それだけでは根本的な学力の上昇はありえない。

〔悪趣味な自己啓発である〕

前項は、百歩譲って「内容は正しい」という仮定の下での話でした。しかし、大変悲しいことに、それに該当するのは世に出ている「勉強法」のほんの僅かに過ぎません。残り
の大半は、その正確性にも難があるのです。例えば、オカルトまがいに「‘気’を利用する」とか、「ただ〇〇しているだけで、突然できるようになる」、「一日たった〇分で、頭がよくなる」、「右脳を利用して云々」・・・といったようなものが代表的です。これ程ではないにしろ、まともに勉強ができる人が一目みればすぐに「胡散臭い」と判断できるものはたくさんあります。

これらに共通することは、結局は「趣味の悪い自己啓発」の域を出ないということです。脈絡もなく羅列的に「自分の能力を信じましょう」、「(間違えた部分には) ×ではなく○をつけましょう」・・・といった標語を並べ、各々に筆者の短観を述べていくスタイルは、まるっきり「自己啓発本」そのものです。「自己啓発本」の特徴といえば、「言いたい放題の玉石混合の標語を何百個も見てみて、ようやく自分にも適用できそうな助言が数個みつかる程度」というものです。これでは、「勉強法」を体得するにはあまりに効率が悪すぎます。

「勉強法」を読むことばかりに時間を取られ、肝心の「勉強法」はほとんど身につかないのです。

実際、世間の成績上位者で『悪趣味な自己啓発的勉強法』のおかげで優秀になれました」などという人はまず存在しません。それは、カリスマ投資家が書いた「投資の自己啓発本」を読んだからといって、その読者が皆大金持ちの投資家になれるわけがないと同じことです。どうしてもこれらを利用したいのであれば、単なる参考所見として「何か一つくらい使えるネタはないかな？」というつもりで読み流すくらいが、関の山といったところでしょう。

「悪趣味な自己啓発的勉強法」の多くは、物知らぬ庶民を餌食とするため、「非常識な方

法であるが故に、他人に差をつけられる」とか「楽に習得できる」、「簡単に合格できる」という謳い文句で売り出しています。さらにタチの悪い事に、最終的には、暗に著者が推薦するスクールや教材販売の勧誘に繋がっているケースが非常に多くあります。

本書は、そのようなインチキ臭い勉強法の真似事だけは絶対にしないということをポリシーに掲げています。幸い、筆者自身は「勉強法」をエサに商売しなければならない立場にはないので、中立的な目線からこれが実現できると思います。「まがい物」が出尽くした感のある今、全身全霊をもって「本物」に挑戦すべきだと考えます。

大半の「勉強法」は、内容がインチキな「悪趣味な自己啓発本」に準じる内容である。それらは参考所見としての利用価値しかなく、全てを真に受けるのはほとんど無駄である。

<正しい勉強法>

前節で「使えない勉強法」の欠陥がわかりました。では、本質をとらえた「使える勉強法」とはいったいどんなもののでしょうか。もちろん、皆さんにとっての最優先事項であろう「成績が最短で上がる」ということははずせません。その一方で、「勉強の本質」という点では、もう一步踏み込んだ視点も持つておくほうが賢明です。

- ・ 当たり前の勉強法
- ・ さらなる勉強の本質

[当たり前の勉強法]

前節で挙げた欠点のない勉強法を考えてみます。まず、「枝葉末節論に終始する」の反対は「**根幹を押さえている**」ということです。野球投手でいえば、「レアな変化球の投げ方の微妙なコツ」ではなく、「よい直球を投げられる体作りとフォーム作り」を押さえるということに相当します。当然、これは学業成績を根本的に、しかも最短で底上げする原動力となります。

そして、「**根幹を押さえている**」ということは、すなわち「**当たり前の勉強法**」ということでもあります。「なんだ」と思われるかもしれませんが、投手の例でも「よい直球を投げられる体作りとフォーム作り」とは、詰まるところ「地道な走りこみ、筋トレ、投げ込み」であったりするわけです。これと同様に、成績を上げたいなら、つべこべ言わずに理解や暗記はしなければならないのです。それは、確かに誰でもわかっている「当たり前」のことに違いありません。

ただし、「プロローグ」で述べた通り、それを見過ごしてしまうのは大きな誤りです。実情として、「当たり前の勉強法」の完全な把握ができている人は極めて少なく、「**当たり前**」という認識は**完全な盲点**となっています。その過信こそがほとんどの人にとって成績が伸びない主な原因なのです。「頑張らなきゃいけないとは思いますが、どう頑張ったらいいかかわからない」といった人もその典型例でしょう。

そして、「悪趣味な自己啓発」の反対は、「**系統的で理路整然としている**」ということです。

例えば、「数学」のような立派な「学問」を想像してみてください。「数」や「図形」といったような各単元は、脈絡もなく思いつきで並べ立てられているのではないはずです。それらは、混同されることなく順序良く配列され、内容も過不足なく、それら同士の関連性が一貫性を持ち、大きなストーリー性を持って編纂されています。逆に言うと、物事を真剣に学び、会得しようとするには、このような形でなければまともな方法論として通用しないのです。

勉強法も同じです。完全な「学問」とまではいかなくとも、なるべくそれに近い形式を実現してこそ、説得力があつて、皆さんを納得させることができる勉強法となるのではないかと思います。

以上を踏まえ、「当たり前」の方法論でありながら、誰しもにとって明確にその体系をわかりやすくまとめるということが、本書の基本コンセプトになります。目新しいジョッキングで革命的な手法を主張していくわけでは決してありません。

しかし、今まで、「当たり前」のことを、全ての人が「当たり前」と思えるように、そして、いつでも手にとって確認できるように、系統的に提示をする「勉強法」はありそうではなかったものです。その点では、むしろ「新しい」とも言えます。いわば「**故きをたずねて新しきを知る**」、すなわち「**温故知新**」の気持ちが込められているのです。

スポーツなどでもよく言われることですが、「当たり前のことを、当たり前のようにやる」ということが一番難しく、そして一流の必要十分条件でもあります。ですから、この段階をしっかりと探究することで、必ずや勉強に関する新発見やブレイクスルーがあるはずです。それは、現時点で勉強が得意でない人はもちろんのこと、成績が優秀である人にとっても同様にあてはまります。

本質をとらえた「使える勉強法」とは、「**当たり前の勉強法**」のことである。それを、全ての人にとって明確に系統的にまとめたものが、一流の勉強への必要十分条件である。

〔さらなる勉強の本質〕

前項の「**当たり前の勉強法**」さえできれば、満足いく程に成績を上げるには十分ですし、逆に、それ以外の手段もありません。正しく実践できれば、全国上位に顔を出すくらいの成績だって現実味を帯びてきます。ただし、本質を捉えた「**正しい勉強法**」を提言する際に、それだけを目指にするというのも疑問符がつきます。

ただ勉強をするだけなら、インチキな勉強法でも多少は役目を果たしますし、成績を上げるだけならスパルタ教師の指示通りにしていればいいかもしれません。しかし、そこで

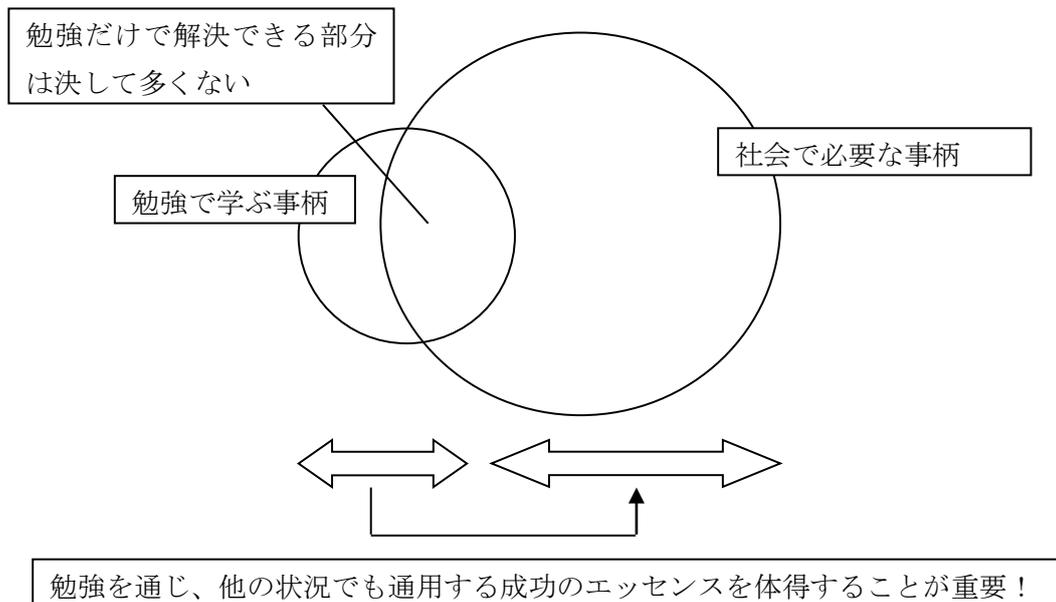
考えてみてください。勉強に興味を持てた、勉強が得意になってきた、そして〇〇を習得した、〇〇に合格した。それから皆さんはどうしますか？その次にどうしますか？

勉強は、あくまで手段であって目的ではありません。人生における長期的な真の目的を達成するためでなければ、意味がなくなってしまう。「難関資格を取ったのに、食えない」とか、「難関校に合格したのに、落ちこぼれた」、「学歴だけは優れているが、てんで仕事ができない」といったことは、その最たる例です。

この事実を考えるにあたってキーポイントとなるのは、「**それまでにしてきた勉強**」と「**その先にある活動**」との間における「**ギャップ**」です。例えば、医師という職業で考えても、「医学だけ」の知識がありさえすればその職が務まるわけではありません。同様に、有名な進学校に入っても、受験勉強科目の内容が大人になってからの仕事等にそのまま役立つわけではありません。普段机に向かってやる勉強は、基礎的な土台として絶対不可欠なものです。このように、それだけで世の中の万事が解決するということは、決してありえず、必ず現実世界における実務活動や未知の学問領域との間に「**ギャップ**」が存在するのです。

そして、**机上の勉強の実力に加えて「ギャップを埋める力」**が伴って初めて、**社会的な活躍ができる**わけです。例えば、何かしらの資格を有効活用して上手に稼いでいる人は、資格そのものの効能だけに頼らず、「頭」もよく使っています。「今、この資格保持者が必要とされている領域はどこか」、「顧客を獲得するにはどんなサービスを展開すべきか」、「さらに付加価値をつけるために、他に学ぶべきことはないか」・・・こうしたことを常に考え、自分の仕事に活かそうとしているはず。つまり、勉強の成果としての資格そのものというより、その資格を取っただけの勉強ができる自分の能力の運用に長けているのです。

逆に言うと、「**正しい勉強法**」は、**勉強を通じてこのような力が同時についてくるようなものでなければなりません。**次図を参照してください。勉強に成功する過程において、将来のあらゆる状況でも通用するような「**成功のエッセンス**」を体得すべきなのです。



「プロローグ」で述べた通り、以上のことも本書におけるもう一つの重要なコンセプトになっています。ごちゃごちゃした適当な勉強や、他人による指示の完全な言いなりというのは、これとは全く無縁のものです。

「勉強の成功」を通じ、将来のあらゆる社会的状況においても通用する「成功のエッセンス」を体得することも、「正しい勉強法」の重要な役割である。

<本書の展望>

これまでのポイントに留意しながら、次章からいよいよ「勉強法」を扱っていきます。

さて、前節の内容を言い換えると、「勉強」には、いわゆる「試験のための勉強」と、「頭がよくなる勉強」の二種類があるということになります。もちろん、両者とも本書の重要なコンセプトであるわけですが、二つの視点が混ざったスタンスで「勉強法」を語っていかうとすると、焦点がぼやけてわかりにくくなってしまいうことも事実です。そこで本書では、当面は前者、すなわち「試験のための勉強」をターゲットに据えることにします。

その理由は、第一に、皆さんがまず最も求めているのが、それであるからです。「どうせ同じ試験を受けるなら、最短で結果を出したい。受からなければ何も始まらない」と考える人が本書を手にとった人のうちの大多数を占めるはずでう。綺麗ごとを語る前に、そのニーズには応えなければなりません。

そして第二に、「試験のための勉強」が正しくできるのなら「頭がよくなる勉強」の実践も難しくないからです。「プロローグ」でも述べましたが、「積み木」を重ねるのと同様に、「頭がよくなる勉強」は「試験のための勉強」の延長線上にあるものであり、そこで通用するエッセンスは根本的に共通しています。この両者は全く別物だと強弁する人もいます

が、それは誤りです。むしろ、成功のノウハウがパターン化された「試験のための勉強」を通じて訓練をし、「頭がよくなる勉強」への踏み台とするほうが、ずっと効率が良いときえ言えます。

さて、当面は「試験のための勉強」を見定める方針としても、完全に「片手落ち」のまま終わるわけにはいきません。そこで本書では、「試験のための勉強」を扱っている最中に、その大きなストーリーが「頭がよくなる勉強」へのステップアップとなるような工夫を施しました。そして、「勉強法」の最後の締めめに、それらの伏線を回収するという形で「試験のための勉強」と「頭がよくなる勉強」の解説を両立させたいと思います。

この本書全体の構成をもって仕掛けたカラクリは、ただ受動的に受け入れるだけでは面白くありません。せつかくですから、「探偵小説」を読むのと同様に、自分自身の頭を能動的に使って、仕掛けを思索しながら最後まで読み進めていただきたいと思います。そのようにしてエッセンスを身に付ければ、効果も大きく増すはずです。

最後に、次章以後に臨むにあたって、大きな流れが把握しやすいように、章立ての概略を記しておくことにします。

まず、第二章では「勉強法理論」と銘打って、「勉強法」の全体骨格を解説します。そこで、「勉強法」がどんな要素から構成されているかを抽出することにします。

そして、第三章～第十四章が、いわゆる「勉強法」です。章数からもわかる通り、本書のメイン部分になります。第二章で抽出した各要素に対応しながら、具体的に実践すべき勉強のイロハを解説していきます。

第十五章は、先ほど申し上げたように、メイン部分を扱う間に張っていた「頭がよくなる勉強」への伏線を回収します。ここまでの、本書で訴える「勉強法」が完了します。

ではビシっとしていきましょう！

勉強には、いわば「試験のための勉強」と「頭がよくなる勉強」がある。ただし、両者のエッセンスは根本的に同一のものである。
当面は、前者に標的を絞って解説していくが、そのストーリーの中で後者への伏線を張り、最後にそれを回収する。

『第二章：勉強法理論』

<勉強法の理論>

いよいよ勉強法に入っていきます。さて、普通に「勉強法」と言われると、多くの方は「暗記法」などが真っ先に思い浮かぶと思います。しかし、そのような枝葉末節論にいきなり飛び付いてはいけません。まずは、大枠からしっかり紐解いていきます。

- ・ 勉強法を表す理論式
- ・ 勉強法の展望

[勉強法を表す理論式]

勉強に臨む際、「やる気はあるのだけれど、何をどう頑張っているのかわからない」という方がしばしばいます。このような人にとっては、勉強法を構成する多くの要素がごちゃごちゃと一度にのしかかって、頭がパンクしてしまっているのです。そこで、勉強に必要なとされる各要素を、相互の関連性を明確にしながらいリストアップすることにしましょう。

ここで登場するのが、本書オリジナルの「**勉強法を表す理論式**」です。これによって、整然と全体像の把握ができるはずです。

$$\frac{\text{勉強量}}{\text{意志} \times \text{スペック} \times \text{手法}} = \text{時間}$$

それでは、この式がどのような意味を持つか考えていきます。

式を考えると、「距離÷速度＝時間」の関係を思い出せば、わかりやすくなります。例えば、100kmの距離を時速50kmの車で移動するには、2時間かかるという関係式です。もし、時速25kmの車であれば4時間かかります。先の式では、もう少し複雑な形をしています。基本骨格は同じです。「距離＝勉強量」、「速度＝意志×スペック×手法」と相当させることができます。

例えば、ある学生A君が遠くない未来にB学校の受験を控えているとします。現時点でのA君の実力が、B学校に合格するのに必要な実力に到達していなければ、A君はそれを埋めるに相応しい勉強量をこなさなければなりません。これが、いわば車で移動すべき「距離」のようなものです。

そして、「意志×スペック×手法」は、車の「速度」をもう少し細かく分解すれば、概念がみえてきます。まず、どんな車をどんな人が運転しようと、「本人がスピードを出すつもりがあるかどうか」が影響を与えます。プロのドライバーがF1カーに乗っていても、アクセルを全開に踏もうとしなければ、走りは遅いままです。これが「意志」になります。

次に、車の性能も当然影響します。F1カーのほうがポンコツ車よりもスピードが出ます。これが、すなわち「スペック」で、言い換えると「才能や能力」に相当します。勉強でい